

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 28 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730388

研究課題名(和文) 会計制度の社会学的分析に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Research on Sociology of Accounting

## 研究代表者

堀口 真司 (Horiguchi, Shinji)

神戸大学・経営学研究科・准教授

研究者番号：10432569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「会計制度の社会学的分析に関する基礎的研究」という課題のもと、本研究では、1980年代以降、主としてヨーロッパを中心に取り組まれてきた、会計制度を社会学的な観点から分析してきた研究の動向とその意義を体系的に整理し、今後、当該研究方法を日本の文脈に応用しその成果を海外へ発信していく際の基礎となる知識を提供することを目的に、参考となる書籍の作成を進めてきた。

研究成果の概要(英文)：In this research project, under the theme of “Fundamental Research of Sociological Studies on Accounting Institutions”, I systematically reviewed the meanings and the implications of the sociology of accounting which have been conducted mainly in Europe since 1980s. I expect the result of this research project will be a good foundation for the next generation researchers in Japan who will try to study Japanese accounting institutions from the sociological perspective.

研究分野：会計社会学

キーワード：会計制度 社会学的分析

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 会計の役割は、時代や文脈に応じて変化する。現代社会における会計の役割は何かと言われれば、投資家に対して有用な情報を提供することであると説明すれば、大きく外れることはない。しかしながらよく知られているように、この情報提供機能が会計の主要な目的となったのは比較的最近のことである。財産管理、損益計算、業績管理など、会計はこれまで様々な役割と関わらせられながら捉えられてきた。要するに、他のさまざまな制度と同じく、会計の役割もまた固定的ではない。記録、計算、伝達、管理など会計に関わる行為は時代や文脈によって、またそれを捉える視点に応じてその姿を変えることになる。

(2) 社会学的分析とは、ある仮説や理論の前提を疑い、これまで自明のものとして考察されてきた対象を、より広い文脈の中で捉えなおそうとするものである。学問として比較的長い歴史を有する会計学においても、これまでにさまざまな機能や役割が定義され対象化されてきた。財産管理、利益計算、業績管理、情報提供などがその代表であり、これらの定義された機能の下で多様な会計研究が展開されてきた。しかしながら、それらの定義も時代とともに変化するものであり、会計と呼ばれる現象もまた、時代に応じて新たな役割を獲得しているものと考えられる。

(3) 1980年代以降、ヨーロッパを中心に組み込まれてきた会計制度の社会学的な分析は、その政策提言的な役割の可能性から、イギリスを震源にゆっくりと世界へ広まってきた。例えば、会計の社会学的分析を扱う中心的な雑誌である *Accounting, Organizations, and Society*(AOS)誌の創刊者が、副編集長とともに、当該領域を先導してきた研究者らの代表的な論文を厳選し編集した Hopwood and Miller (1994) は、実践としての会計、すなわち生きた現実の会計に改めて目を向けようとしたものである。理論と実践の対応を考えれば、研究とは実践を観察し理論を導き出す活動といえる。財産管理、損益計算、業績管理、情報提供といった機能も、会計実践を説明するために導き出された、いわば理論である。そのような理論を採らず、改めて実践へ注目することは、既存の理論枠組みでは捉えきれない現象が、会計

実践の中に認められることを示そうとすることに他ならない。複式簿記、原価計算、利益計算、監査といった会計実践が、教科書通りの役割に資する中立的な手段としてだけでなく、実にさまざまな社会的要素と関わりながら姿を変える様子が描き出されてきた。

(4) 一例として、Power (1997)は、上記 Hopwood and Miller (1994)の最終章を担当した著者が、同じテーマの下で現代社会における監査実践の役割をより広い文脈へと位置づけ直したものである。本書では、1980年代を通じて監査業務を求める政策的な傾向が強まり、またそれらの要請に柔軟に対応できた監査技術の性質が詳細に分析されている。具体的には、政府部門の改革、金融規制の整備、品質や環境問題への対応という政策的要請の下で、サンプリング手法、内部統制システムの構築といった手段を通じ、監査実践は爆発的に広がってきた。

また Power (2007)は、リスク管理システムに焦点を当て、1990年代以降組織生活の特徴づけてきたものは、あらゆるものをリスクという観点から捉え直すような管理システムの構築であったと説明する。当初、金融規制の基盤として各組織へ内部化することを勧められた内部統制システムの設計原理が、その後全社的リスク管理(ERM)として標準化され、規制当局、金融専門家、保険計理人、会計専門家を巻き込み、組織単位で不確実性を組織化するプロセスが描かれる。

(5) このように、会計の社会学的な分析は、世界でも一定の評価を得てきたが、日本ではいまだそうした研究の成果が断片的に紹介されるのみで、日本人研究者が当該分野で活躍する機会が極めて限定されているのが現状であった。

## 参考文献

- Hopwood, A. and Miller, P. (eds.) (1994), *Accounting as Social and Institutional Practice*, Cambridge University Press. [A. ホップウッド & P. ミラー編(2003)『社会・組織を構築する会計 欧州における学際的研究』、岡野浩・國部克彦・柴健次訳 中央経済社。]
- Power, M. (1997), *The Audit Society*:

*Rituals of Verification*, Oxford University Press. [ M. パワー (2003) 『監査社会 検証の儀式化』、國部克彦・堀口真司訳、東洋経済新報社。]

Power, M. (2007), *Organized Uncertainty: Designing a World of Risk Management*, Oxford University Press. [ M. パワー 『リスクを管理する 不確実性の組織化』、堀口真司訳、中央経済社。]

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、そうした会計制度の社会的な分析の動向とその意義について体系的に整理し、今後、当該分析方法を日本の文脈へ応用し、その成果を海外へと発信していく上で、必要とされる知識基礎とその学術的貢献の方向性を明示することを目的として、当該分野の手引書となるような書物の執筆を試みた。

(2) 具体的には、主として複式簿記の史的展開を史料に基づいて跡付けようとしてきた会計史的研究が前提としてきた近代歴史学の理論的基礎にあるヒューマニズム、会計情報の市場への影響を実証しようとする一連の研究が前提としてきた新古典派経済学の理論的基盤であるユートリタリアニズム、を乗り越え、現在の会計実践が、公的部門におけるニューパブリックマネジメント(NPM)や、私的部門における社会的責任(CSR)概念の浸透に見られるような、マネジリアリズムと呼ばれる現象の下で、新しい役割を獲得しつつあることを示すこととした。

## 3. 研究の方法

(1) 上記の研究目的を達成するために、当初、以下のような枠組みで、ヨーロッパにおける既存研究を整理し、手引書を作成することとしていた。

会計制度の社会的分析の意義

- ・社会学の起源と経営学の交差
- ・相対主義的会計研究の現代的地平

会計制度におけるマネジリアリズムとその相克

- ・現代ネオリベラリズム下の管理体制
- ・管理のシステム化とその相対化

会計制度におけるユートリタリアニズムとその相克

- ・国家の市場化と会計規制のグローバル化
- ・市場を中心とする世界設計とその相対化

会計制度におけるヒューマニズムとその相克

- ・複式簿記の史的展開と近代歴史学
- ・近代歴史学の世界観とその相対化

(2) しかし、ヨーロッパにおける当該領域の研究動向が必ずしも上記の観点から進められているわけではないことから、それらの動向をより適切に反映するために、方法論に関する分類をフランス社会学、ドイツ社会学等に分け、第1部として再構成することとした。また合わせて新たに当該方法論の具体的適用例に関する部を設け、「1. 会計制度の社会的分析の方法論」「2. 会計制度の社会的分析の応用」から成る2部構成として進めることとした。

(3) 具体的には、第1部では、フランス系社会学の基礎としてフーコーやラトゥールの議論を扱い、ドイツ系社会学の基礎としてハーバーマスやルーマンの議論を扱う。また第2部では、第1部で示された社会的な分析視角の応用対象として、これまで会計制度の基礎概念として利用されてきた「会計責任(アカウンタビリティ)」概念を取り上げ、その意義と限界を新たなマネジリアリズムという文脈の中で整理することとした。

## 4. 研究成果

(1) 主な研究成果は、当初の計画通り、以下の内容の書物を出版することである(今年度内刊行予定)。

序章 会計の科学化と科学の会計化 会計社会学の必要性

第2章 相対主義的会計研究の現代的地平

第3章 フーコディアン会計研究の視座

第4章 ラトゥーリアン会計研究の視座

第5章 会計規制のトリレンマ

第6章 説明責任の制度化とその問題

終章 Making Science Accountable?

## (2) 序章内容

本章では、会計研究が科学へ依存しつつある現状と、科学が会計理論であるアカウンタビリティに依存しつつある現状について

て説明し、本書全体の導入とする。具体的には、近年の会計研究（例えば実証研究やケース研究）が、自然現象を分析の対象へ据える自然科学の認識論を応用し、あたかも会計現象という分析対象が客観的な事実として存在し、それをいかに表象するかという点にとらわれつつある点を説明する。そこでは、実践的で実用的な会計が、学問としての正統性を確保するために、科学というオーラを借用している様子が明らかとなる。続いて、近年、科学自体がその正当性を揺るがされ、ますます社会的に開かれた、つまり民主的な議論の場にその存在意義を示す必要に迫られつつある様子を説明する。具体的には、近年、アカウントビリティの名のもとに、科学の公共的な理解が進められつつある。これは、科学そのものがもはやそれ自体で存立することが難しくなっており、広く社会へ開かれた中にその意義を認められる必要に迫られていることを意味する。

#### （３）第２章内容

本章では、近年、会計制度の社会学的分析と呼ばれる領域で展開されてきた研究動向を振り返ることを目的としている。具体的には、政治的文脈の下で理解の再考が求められつつある管理会計研究、政治的・社会的側面の重要性が再認識さえつつある経済理論の実証研究、ヒューマンズムにとらわれてきた複式簿記の歴史的研究の再考について取り上げている。これらの分類を通じて既存研究を整理し、現在の会計社会学がどのような方向性を目指すものであるかを詳述する。

#### （４）第３章内容

本章では、既存の会計研究の中で、いかにヒューマンズムの影響が大きく、その前提にとらわれてきたのかを明らかにするために、フランスの思想家ミシェル・フーコーの分析視角を会計現象へと応用してきた既存研究の整理を試みている。具体的には、近代を形成する言説の中には、人間性を形成する側面と、それ以外の視点を隠そうとする側面が認められ、会計自身もその具体的な言説生成のための道具として作用してきた点が明らかにされる。

#### （５）第４章内容

本章では、科学社会学の視点から会計現象を分析してきた既存研究の動向について

解説する。近代の形成に大きな影響を及ぼした科学は、近年、その正統性を疑われつつある。それまで客観的に存在すると想定されてきた自然現象が、実はある特定の観点から見た対象物に過ぎず、決してどの観点から見ても共通に存在するものではなかったことが明らかになりつつある。本章では、そうした見方のもとで、最近注目を集めているアクターネットワーク理論、つまり人間と非人間を等価視し、その中でいかに対象物が構築されるのかを見る分析視角を、会計現象へと応用した研究を振り返っている。

#### （６）第５章内容

本章では、これまでの章で見えてきた内容から、決してどこにも世界を普遍的に見渡す安全な場所がないことを示した上で、そのような世界の多元性を見るための視点として、生物学の世界で開発されたオートポイエシスシステムという分析視角を紹介し、そうした観点から会計現象を見た場合、どのような世界を描くことができるのかについて解説する。具体的には、会計規制という制度が、会計という視点から見た世界設計に過ぎず、他の世界との接点において問題をはらむ可能性を指摘している。

#### （７）第６章内容

本章では、説明責任という会計理論を取り上げ、近年この理論枠組みが会計以外の様々な領域へ拡大しつつあること、またそこにはらむ本質的な問題について指摘する。具体的には、これまでの章での議論を踏まえ、説明責任というものが、究極的には自己の観点からの説明にしかなりえず、決して他者の視点を説明することができない点を明らかにし、記念の制度設計の矛盾を明らかにする。

#### （８）第７章内容

本章は、本書の最終章として、科学や学問、高等教育の説明責任について取り上げ、本書の分析視角から見た場合の、根本的な問題を指摘することによって、本書の意義を説明する。

#### ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

堀口真司 2014「フーコディアン会計研究の視座」『国民経済雑誌』査読無、第 210 巻第 1 号、25 - 42 頁。

〔学会発表〕(計 4 件)

Horiguchi, S. 2015 “Philosophy of Japanese CSR: Extensive Accountability or Bureaucratic Ethos”, Presented at European Business Ethics Network Research conference 2015, 1-3, October, Copenhagen, Denmark.

Horiguchi, S. 2015 “Reconsidering ethical aspects of Japanese management”, Presented at European Business Ethics Network Annual Conference 2015, 26-28, June, Istanbul, Turkey.

Horiguchi, S. 2014 “Rereading the Japanese management: From ethical point of view”, Presented at European Business Ethics Network Annual Conference 2014, 12-14, June, Berlin, Germany.

Horiguchi, S. 2013 “A Critique of CSR in Japanese context”, Presented at European Business Ethics Network Annual Conference 2013, 12-14, September, Lille, France.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀口真司 (HORIGUCHI Shinji)  
神戸大学・経営学研究科准教授  
研究者番号: 10432569

(2) 研究分担者

該当なし ( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

該当なし ( )

研究者番号: